

DCD 児の協調運動技能のチェック票の作成とその有効性の検証 (中間報告)

北海道医療大学 橋本 竜作

Development of checklist for Coordination Movement Skills in Japanese Culture

Health Sciences University of Hokkaido, HASHIMOTO, Ryusaku

要約

本研究の目的は、DCDの診断基準であるDSM-5の基準Bを満たすチェック票を作成することである。不器用さを持つ子どもの保護者に、柏木・鈴木(2006)を参考に27項目からなる質問紙を実施した。その結果、いくつかの項目が子どもの学業成績や日常生活活動に影響を与えていることを推定するのに十分な内容であると考えられた。しかし、項目の中には保護者が理解できるようにさらに詳細な状況を付け加える必要があり、また回答欄への改良が必要と考えられた。

【キー・ワード】発達性協調運動症, 質問紙, 保護者

Abstract

The purpose of this study is to develop a checklist that meets criteria B of DSM-5, which is the diagnostic criterion of DCD. We conducted a questionnaire consisting of 27 items based on Kashiwagi and Suzuki (2006). As a result, some items were sufficient to estimate their influence on an academic performance and daily living activities. However, content of the items (e.g., include more detailed contextual information about the situation) and number of scale point are still need to be improved.

【Key words】 Developmental Coordination Disorder, Checklist, Parents

はじめに

発達性協調運動症 (Developmental Coordination Disorder : DCD) とは、協調運動技能の獲得や遂行が年齢などから期待されるよりも劣っており、不器用さ、運動の遅さや不正確さとして現れる。そして、その運動技能の欠如が日常生活活動、学業成績、遊びなどに悪い影響を与えている状態である (DSM-5)。これまで自閉スペクトラム症、注意欠如/多動症などの発達障害に比べ、教諭の教室運営を難しくする訳でもなく、また本人の困難さが周囲の人々にも伝わりづらいため、運動に関する困

り感は軽視され、支援の取り組みが遅れてきた。しかし、幼児期から学童期に経験される運動の問題は、子どもの生活場面や遊びのなかで「うまくできない」という感覚が重なり、本人の中に自尊感情が育ちづらいという結果を招く可能性がある。

目 的

DCD の評価について、欧米では DCD Questionnaire という運動発達に関する質問紙や、子どもの運動評価バッテリー (Movement-Assessment Battery for Children : M-ABC) が利用されているが、国内で自由に利用できる状況ではない。また欧米の質問紙は野球・サッカー・バスケットなどを想定した球技の内容が多いが、日本では運動の困難さ (不器用さ) は、折り紙、はさみを使った工作、鍵盤ハーモニカやリコーダーの演奏、漢字の書字といった場面で現れるため、文化や教育、環境によって質問項目を検討しなければ、学業成績や遊びにおける問題 (DSM-5 における基準 B) を明らかにできない。また M-ABC は専門家が発達支援センターなど専門機関で実施するにはよいが、学校で DCD 症状をチェックするためには負担が大きい。

そこで本研究の目的は、日本の文化・環境に合致し、簡便に実施できる協調運動技能のチェック票を作成することである。

進捗状況

日本の文化・環境にあった協調運動技能のチェック票を作成するため、運動発達の難しさをもつ児童の保護者に面談を行い、どのような場面で「不器用さ」を感じるのかを聞き取り調査した。また予備調査として、27 項目からなる運動発達に関する質問項目を柏木・鈴木 (2009) を参考にして作成し、実施した。具体的には「ボタンの留めはずし」という項目に対して、「現在も苦手」「現在は苦手ではないが、過去は苦手だった (以下、過去は苦手)」「過去も現在も苦手ではない (以下、苦手ではない)」の 3 件法に、「わからない」を加えて回答を求めた。

運動が苦手な小学生の保護者から、運動に関して ADL 上で気になる点を尋ねると「胸の前でボタンを留めるタイプの服で着脱が遅い。そのためボタンは途中まで留めた状態で、スエットのようになら被るように着ている」、「書く字がきれいではなく、とろい」、「(男の子で) 小便でトイレをきちんと便器にできない」、「ご飯を食べるのが犬食い (体を食器に向けて前傾で食べる)」、「醤油などを適切な量でかけられない (ドバっと出す)」などが報告された。ただ「コンパスや三角定規の使い方が不器用」「縄跳びをトントンと連続して跳べない」といった学業 (体育・算数) に関連する項目も多く報告された。

年長 (6 歳) から中学生 (14 歳) の保護者 6 名に行った予備調査の結果、「水泳 (息継ぎしながら泳げる)」「鉄棒 (逆上がり)」「音にあわせてダンス (ラジオ体操, お遊戯など)」「折り紙 (端と端を合わせて折る)」「スキップ」「字を書く (正確さ)」は半数以上の保護者が「現在も苦手」と回答している。また「ボールを捕る」「障害物を飛びこえる」「バットやラケットで飛んできたボールを打つ」

などは半数が「現在も苦手」と回答する一方で、「わからない」と回答する保護者もいた。さらに「ボールを投げる」「ボタンの留めはずし」は半数以上が「苦手ではない」と回答していた。

以上の予備調査から、次の点が明らかとなった。まず質問項目に関して、「現在も苦手」として挙がる項目は保護者も観察可能で、学校生活で必要とされる運動（体育や図工、音楽など）に関わる内容が多かった。このことから運動の困難さが学業または学校での生産性や遊びに影響を与えていること（DSM-5の基準B）を捉える内容として十分だと考えられた。しかし、海外の質問紙（DCDQ）にもある球技に関する項目（「ボールを捕る」、「ボールを投げる」）は「苦手ではない」、「わからない」と回答する保護者も多く、球技に参加する場面を観察する機会がなければ、同年代の児童・生徒と比較して苦手さを評価するのが難しいのかもしれない。また「ボールを投げる」は、保護者が想像する姿（野球選手のような上投げと、下投げで放り出すのかな）が異なる。それゆえ日常生活で観察可能な表現をもう少し工夫する必要があるだろう。具体的には「本人が思った場所にものを投げることができますか？（例：上投げで2 mほど離れたゴミ箱に電池を投げ入れたり、離れた人の胸元に相手が捕れるように野球ボールを投げたりすることができますか）」という表現を用いることで、球技に限らず、日常的な活動で保護者は観察したり、行わせることで回答しやすくなるだろう。

次に回答欄に関して、柏木・鈴木（2009）の回答方法は発達の変化（現在は苦手ではないが、過去は…）をとらえる点で優れているが、現在の苦手さに関してその重症度を評価することは難しい。そのため回答欄は質問項目の内容に対して、柏木・鈴木（2009）に加え「とても苦手」「少し苦手」「同じ程度できる」「上手」という4段階の評価の併用が考えられた。また **General Impression** として、（少し）苦手に回答した保護者には「質問項目にあった運動の苦手さによって、お子さんの学業成績や日常生活、友だちとの遊びへの参加に対して、よくない影響があると思いますか？」という質問を追加することで、DCDの診断に必要な臨床的な裏づけを行えるのではないかと考えられる。

現在、チェック票の項目および表現を改定しつつ、同時に運動機能に関する評価を行う準備を進めている。

引用文献

- 柏木 充・鈴木周平（2009）. 問診と微細神経学的徴候にほる不器用さの簡易判定法について（9歳以上13歳未満での検討）—発達性協調運動障害診断の指標として—脳と発達, 41, 343-348.
- 日本精神神経学会（監修）（2014）. DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院.
- Wilson, B.N., Crawford, S.G., Green, D., Roberts, G., Aylott, A., & Kaplan, B. (2009). Psychometric Properties of the Revised Developmental Coordination Disorder Questionnaire. *Physical & Occupational Therapy in Pediatrics*, 29, 182-202.

